

國より貢せしに、延喜式典藥寮式武藏國よりは奉らず、されど萬葉集にむさしの、うけらがはなとよみ、今も此國に至て多く、かつ色にづなゆめといへる歌の意を按るに、即今の白花のものとしらる、また稀に赤花のものもあり、アカラケラといふ、増補多識編○中略たゞし日本書紀以下延喜式等、白朮をあげて、蒼朮をのせず、是によりて考ふれば、當時いまだ蒼朮の名を立られざりしにや、

〔大和本草藥〕白朮蒼朮○中 蒼朮ヲキザンテ燒ケバ邪氣ト惡臭ヲ去リ、疫氣ヲ除ク、常ニタクベシ、爲、籠末糊ニ和シ引ノベテ大線香トシ、陰乾シ貯ベシ、

〔和漢三才圖會九十二本〕蒼朮 赤朮 仙朮 山薊 山精

本網昔人止稱朮不分蒼白、自宋以來始分之、○中

按中華之二朮一類二種自明也、倭之二朮一物而宿根如老薑、蒼色者爲蒼朮、嫩根白色者爲白朮、然藥肆皆誤以舊根稱白朮、以嫩根稱蒼朮、或蒼白相混不可不擇、其苗高一二尺、一朶三葉、葉末鋸齒而有毛、四五月開花青色、秋結子大如小豆、蓋生山中者葉硬有微刺、栽人家者葉軟無刺、其葉及根形香氣和漢相似而花色異、且白朮根形不似鼓槌、然唯似謂雲頭朮者耳、出備後三原者良、伊豫今治次之、武州江戸、藝州廣島、奥州仙臺者又次之、

白朮 楊抱音 山薊 馬薊 山薑 山連 抱薊 吃力伽域西 和名乎介良○中

按唐白朮多如鼓槌者爲佳、近年有川白朮者、即是削朮而所切片者不佳、蓋古倭亦不分二朮、一稱乎介良、○中京師五條天神、每除夜群集、祈除疫、社前有賣白朮者、皆求之去焉、本草言、歲旦服蒼朮之事、與此合、

〔物類品隲三〕白朮 和名ヲケラ、上古蒼白朮ヲ分クズ、後世分之、弘景曰、白朮葉大有毛而作極根甜而少膏、赤朮葉細無毛、根小苦而多膏、ト此說二朮ノ形狀ヲ說コト甚明ナリ、然ルニ東壁三五又ノ物ヲ蒼朮トスルハ大ナル誤ナリ、白朮處處山中ニ産スルモノ、葉五又ノモノアリ、三又ノモノアリ